虚子記念文学館投句特選句・令和三年七月

稲畑汀子　選

千余句の俳磚の声露涼し　京都　西村やすし

降り立てば降る記念樹の蝉時雨　新潟　安原　葉

日時計の影も歪んでゐる暑さ　兵庫　池田雅かず

バスを待ち祭太鼓を風に聞く　奈良　堀ノ内和夫

白き帆を沖へ沖へと大南風　兵庫　福間笙子

六甲の山肌黒く晩夏かな　兵庫　西村みどり

六甲の高きを睦み夏の蝶　鳥取　前田　千

窓を雲いくつ通ひて晩夏かな　神奈川　進藤剛至

くり返す母の話よソーダ水　兵庫　山口弘子

送らずにしまふ手紙や夜の秋　兵庫　武田奈々

（青少年）

入選句・令和三年七月

夏の川ほつと木陰の風抜ける　大阪　山下幸典
館涼しホ誌の表紙絵原画展　兵庫　内田泰代
白南風や稜線清し六甲山　兵庫　奥田好子
花合歓に光を添へる雨の糸　兵庫　玉手のり子
迎へらる館人参木の涼し　大阪　田邉育子
松風に吹かれ昼顔芦屋筋　兵庫　川村ひろみ
朝涼のうちに投句を済ませけり　兵庫　塚本武州
夏めきし邸の水辺を去りがたく　兵庫　黒田千賀子
虚子慕ふ水茎涼し遊亀の文　兵庫　山之口倫子
涼やかや人参木に透ける空　兵庫　髙野さち
咲き初めて人参木の風涼し　兵庫　小柴智子
半夏生空の暗さも寄せぬ白　石川　辰巳葉流
庭の合歓三瓶の山を近づける　大阪　辻田あづき
氏神の茅の輪初めてくぐりし児　兵庫　深尾真理子
家居癖つきて外出の暑さかな　京都　山﨑貴子
散り積もる思ひ出の数夏椿　兵庫　高橋純子
梅雨空に線香花火立ち止まる　兵庫　榊原彩羽（青少年）
虚子館に籠る予定の夏休　兵庫　藤井啓子
魂一つ夜星に返す沙羅の花　兵庫　辻　桂湖
蚊遣火や詩人の旧居寂として　兵庫　槌橋眞美
海開コロナの中で客もいず　兵庫　近藤ゆき
凌霄花ひとり住まひのベルを押す　兵庫　永沢達明
いつもより早く塒へ梅雨鴉　大阪　山田　天
思春期の七夕紙の小さき恋　兵庫　中井陽子
門高く香煙低く夏椿　兵庫　岸川佐江
諾うて落つるほかなし沙羅の花　兵庫　吉村玲子
いにしへはその名のありし泉かな　神奈川　平野孤舟
天にまでとよもす声や夜の青田　兵庫　小杉伸一路

露涼し一歩で渡る庭小橋　奈良　好川忠延
一日の余白埋めたる昼寝かな　兵庫　岩水ひとみ
雨あとの俳磚千の涼しかり　大阪　徳岡美祢子
初蟬や心通はす人とゐて　兵庫　田村惠津子
ゴムボート活躍すなり街出水　奈良　芳林淳子
朝には生まれかはりて未草　兵庫　伊藤秀子
夏の花卓に溢れて句友増え　兵庫　金田八江子
朝の間の庭の手入れや露涼し　大阪　綿谷千世子
大琵琶の景になじみしヨットかな　大阪　辻　昌子
かきまぜて炭酸抜く子ソーダ水　兵庫　三木雅子
水平線引き寄せヨット疾走す　兵庫　大西美知子
巫女は緋に禰宜は浅葱の夏の朝　兵庫　道中義臣
医者通ひほうびはいつもソーダ水　兵庫　山崎渺美
きらめきて銀河のごとく夜光虫　愛知　小野　薫
露涼し吟行せよと開くとぼそ　大阪　石橋玲子
空蟬やしがみつく場所取り合うて　兵庫　田中節夫
初蟬やからりと雨の上がる庭　兵庫　二瓶美奈子
百合活けて今日は仲良く窓辺の子　大阪　大川隆夫
明日のこと知るは神のみ大夕焼　大阪　須知香代子
墨跡の書簡涼しく拝しけり　大阪　河辺さち子
教会のクルスの浮ぶ大夕焼　兵庫　松田恭子
旧街道家紋抜きたる日除古り　大阪　鈴木輝子
夕焼が雲の高さを染め上げる　兵庫　池田文子
明日知らぬ七日目の蝉声高し　東京　木村三球
向日葵の勢食み出す子の画帳　滋賀　石川多歌司
水流る虚子館の庭涼しかり　兵庫　岸田　健
うたかたの碧き闇舞ふ蛍かな　兵庫　涌羅由美
夏霧に包まれ孤独感じをり　兵庫　河野ひろみ
鳥声とともに目覚めて山涼し　香川　葛原由起

二十年ぶりの神戸の夏行へと　徳島　奥村　里

金色の如来の背より西日入る　兵庫　高市敦之

水打つにわざとに下駄を濡らしけり　兵庫　キートスばんじょうし

草の根の目覚め真白き舞妃蓮　神奈川　小堀公美子

大茅の輪くぐり終へたる吾子の顔　兵庫　武田優子

芦屋の松きらりきらりと夕焼ける　兵庫　阿曽宏之

梅雨明や熱気ぢりぢり迫り来る　石川　辰巳昌彦

歳時記もやや膨らみて梅の雨　東京　宮村士々

生醤油の焦ぐる匂ひや夏祭　埼玉　土井洋子

梅雨の雷牛の鼻輪の鈍色に　神奈川　金子三奈乃